



日本地球化学会ニュース

No.184 March 2006

Contents

2006年度日本地球化学会年会のお知らせ(1).....	2
日本地球惑星科学連合2006年大会のお知らせ.....	2
学会関連報告	3
2005年度日本地球化学会年会の報告	
学会からのお知らせ	4
会長挨拶	
地球化学・編集幹事の交代	
学会ホームページサーバ移行のお知らせ	
修士パック 会員制度の導入のお知らせ	
研究会のお知らせ	5
第6回核融合エネルギー連合講演会(6/13~14)	
Western Pacific Geophysical Meeting (WPGM)(7/24~27)	
生態学研究への同位体比の応用に関する国際会議(8/13~18)	
人事公募	7
神戸大学発達科学部人間環境学科助教授(4/7〆切)	
金沢大学自然計測応用研究センター助手(4/20〆切)	
大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻助教授(5/1〆切)	
院生による研究室紹介 No.1	9
東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻 平田研究室	
女性研究者に聞く No.1	11
「地球化学」編集長 / 大阪市立大学大学院理学研究科・助教授 益田晴恵	
書評	12

2006年度日本地球化学会年会のお知らせ(1)

会期：平成18年9月13日(水)～9月20日(水)の間の3日間。
はっきりした日時は次号のニュースに掲載致します。一般の方を対象とした日本地球化学会公開講演会も開催の予定です。これについての情報も次号のニュースでお知らせします。

会場：日本大学文理学部
世田谷区桜上水3 25 40
京王線・下高井戸駅・桜上水駅下車，東急世田谷線下高井戸駅下車 徒歩8分
ホームページアドレス：http://www.chs.nihon-u.ac.jp/index-con/info_f.html

内容：課題討論，一般講演（口頭発表とポスターセッション），学会賞受賞講演，総会，懇親会

締め切り：講演申し込み 6月28日(水) 14：00まで
（開始は3週間前6月7日(水) 14：00から）
講演要旨提出 7月26日(水) 14：00まで
（開始は2週間前7月12日(水) 14：00から）
参加申し込み 8月30日(水) 14：00まで

各種申込みの日程で曜日と時間が指定となっておりますので，期日に遅れないようにするとともに，時間にもご注意願います。また，これらの申込は，いずれも学会のホームページ上から行うことを検討しています。詳細は，次号のニュースをご覧ください。

課題討論の課題を募集いたします。そのほか，夜間の研究集会も可能です。メールで申込をください。締切は両方とも5月5日(金)です。課題討論を計画される方は，予め主幹となる講演者のめどを付け，その課題での一般申込があればそれを受け入れてください。課題討論の課題名と担当者名は，次号のニュースに掲載いたします。

年会連絡先：今年の年会は永井尚生実行委員長の下で，東京大学海洋研究所のスタッフと共同開催されます。
〒164 8639 東京都中野区南台1 15 1
東京大学海洋研究所 蒲生俊敬
Tel：03 5351 6451，Fax：03 5351 6452
E-mail: gamo@ori.u-tokyo.ac.jp

日本地球惑星科学連合2006年大会のお知らせ

1) 2006年連合大会レギュラーセッション「固体地球化学・惑星化学」

2001年から合同大会で「固体地球化学・惑星化学」というセッションを行っています。このセッションは，レギュラーセッションとして今後数年間続ける予定です。今年度も開催しますので，多くの方に参加していただくことを期待します。セッション情報は<http://www.jpгу.org/meeting/index.htm>で見ることができます。このセッションは，隕石や地球物質等の天然試料や実験生成物に関し，化学組成や存在形態，同位体比を用いた議論を行うことで，地球で発生する様々な過程，地球・惑星の進化，太陽系の成因等，過去46億年間で起こった現象について多角的に議論する場にしたいと思えます。地球化学に限らず，地質学，岩石学など複数の分野からの講演者が集まって学際的な議論ができればと考えています。春のセッションでは，大学院生を含んだ若手研究者，他学会の研究者が自由に討論できる雰囲気作りに努めたいと思えます。多くの方がた，特に若手の方に是非参加していただければと思えます。ご意見等ありましたら，下田玄（hshimoda@aist.go.jp），鈴木勝彦（katz@jamstec.go.jp），山下勝行（taro@kobe-u.ac.jp），松本拓也（matsumoto@ess.sci.osaka-u.ac.jp）までお寄せ下さい。

2) 2006年連合大会レギュラーセッション「水循環・水環境」

水循環・水環境は2002年度の地球惑星合同大会から始まった多学会横断型のセッションです。水文・水資源学会，日本地下水学会，日本地球化学会，日本水文科学会の4学会の共同開催で，レギュラーセッションとして開催されています。複数学会が共催するセッションの数はまだ決して多くはなく，地球化学会ではこのセッションは1つだけですが，分野を横断した重要なテーマとして7学会が公認して開催が決まったものです。

このセッションでは，河川や地下水，蒸散や蒸発に関する水循環プロセス，流域や地球規模の水蒸気輸送，水資源としての水質や水量の問題など様々で，様々な時間・空間スケールの研究発表が様々な分野の研究者により行われています。水同位体比や溶存イオンのデータを取り扱ったものも数多く発表され，異分

野の交流が活発に行われています。

2006年大会については <http://www.jpгу.org/meeting> を参照ください。水循環・水環境のセッション (H120) についてのご意見、お問い合わせは杉本敦子 (sugimoto@star.dti2.ne.jp) までお願いします。

なお、2006年連合大会の大会参加登録、予稿集原稿投稿の申込受付は、2006年2月8日(水)に締め切りました。

学会関連報告

2005年度日本地球化学会年会の報告

日本地球化学会年会実行委員会委員長
渡久山 章 (琉球大学・理学部)

2005年度日本地球化学会年会第52回大会は、9月26日(月)から28日(水)の3日間に渡って、琉球大学千原キャンパス(共通教育棟、法文学部棟、大会会館、中央食堂)で開催された。琉球大学での開催は23年振りであった。

本年会の参加者、講演数等は下記の通りであった。

参加者：308(名誉会員1人、正会員162人、学生会員38人、非会員47人、学生非会員105人)

口頭発表：177

ポスター発表：131

課題講演は4テーマで、各々は、1)海底熱水系と熱水ブルームの地球化学、2)縁辺海の大気・河川・海洋間の物質循環、3)炭酸塩の地球化学 炭酸塩を用いて過去から未来への地球環境変動を解読する、4)地殻 マントル 核の物質循環と固体地球の化学進化 であった。当初課題講演への応募が低調だったので、評議員の方々を通して募集したところ、短期間で集まったのはさすがであった。

1日目の夜間小集会は「日本地球化学会を取り巻く国内状況とアジアにおける地球化学の動向」と題して行われた。その中で、松田副会長から会員問題について、川幡行事幹事より地球惑星科学連合の発足について、山本庶務幹事より文部科学省の学会誌政策について報告があった。また、韓国梨花女子大学校師範大学の金先生が韓国における、中国科学院地球化学研究所長の劉先生が中国における地球化学の状況について話して下さった。

2日目の総会に続いて受賞講演会が開かれた。学会賞は北大低温研の河村公隆氏(演題は、有機エアロゾルの組成と変質に関する地球化学的研究)、奨励賞は海洋研究開発機構の西尾嘉朗氏(演題は、リチウム同位体分析手法の確立と地球内部物質循環に関する同位体地球化学的研究)、産総研地質調査総合センターの太田充恒氏(演題は、鉄・マンガン水酸化物と海水間の希土類元素の分布に関する研究)が講演して下さった。なお奨励賞を受賞された Inst. Ocean Sci. (Canada) の川合美千代氏(酸素同位体やCFCsなどをトレーサーとする寒冷海水の流動に関する研究)は都合で参加されず、講演要旨のみの掲載となった。受賞講演に続いて中国科学院地球化学研究所所長の劉先生による特別講演も行われた。

会計に関することであるが、8社から広告掲載を受け、4社がブースを開設され、事務処理もスムーズに行っていただき、この場を借りて感謝申し上げます。

問題点としては、プログラムを組んだ後に、発表順序の入れ換えをしなければならないということがあった。講演申し込み時に備考欄へ希望する発表順を記入するようになっていたが、実行委員会側の見落としがあり、ご迷惑をおかけした。また、同時期に放射化学討論会と海洋学会が開催されたため、そちらへの参加希望者から発表日程の変更希望が出されたが、一部希望に答えられなかった。関連する学会との事前打ち合わせ、開催時期の変更など今後の課題と思われる。

年会終了後、10月1日(土)、自治会館(那覇市在)において、公開講演会が催された。“サンゴ礁が語る地球環境”という大テーマのもとで、3名の先生方が講演された。まず琉球大学理学部・生物系の土屋誠教授が“サンゴ礁で地球の健康診断”として話され、次いで同学部・化学系の大森保教授が“沖縄のサンゴ礁から見える地球環境”と題され、最後に本会の名誉会員であられる北野康先生(名古屋大学名誉教授)が“炭酸塩物質(石灰石)を通してみる地球の海と空”として話された。聴衆者は192名であった。その内高校生が45%、一般が35%、大学生が20%であった。先生方は熱意を込めて話され、回収されたアンケート(90%近くの回収率)には、わかりやすく、濃い内容であったという評価がとても多かった。アンケートの中で、今後化学の講演会があれば、どんな話が聞きたいか?という問いに、答えた高校生のベスト8は、宇宙・太陽、生命科学関係、水、地球環境、地震・災害、化学、川と海、サンゴ、コンピュータ関係であった。講演し

てくださった先生方に改めて、お礼申し上げます。

沖縄で年会・公開講演会を開催するに当たり、最も心配したのは台風であった。今回も接近した台風がありいろいろ対応策を考えていたが、それとてくれてなんとか終了することができた。参加・協力して下さった皆様方に厚くお礼申し上げます。

学会からのお知らせ

会長挨拶

日本地球化学会会長 松田准一

田中会長より引き継ぎ、2006年1月より日本地球化学会の会長になりました。私の任期は2年間ですが、前執行部からの引き継ぎ事項もあり、今期どのような活動をしていくかということも含め、御挨拶したいと思います。



日本地球化学会は、1953年の地球化学研究会の発足に始まり、Geochemical SocietyやEuropean Association for Geochemistryの学会よりもより古い歴史をもつ学会です。もともとは国内で研究者相互の交流をはかることが目的でしたが、50周年事業の一環として、2003年に日本の倉敷で、Goldschmidt国際会議を開催、Geochemical Journal Awardはそれ以後のGoldschmidt国際会議でも授与式が行われるなど、学会としては、ますます国際的な活動が要求されるようになってきております。それに伴い、今期の執行部としては、以下のような課題を中心に活動を進めて行きたいと思っております。

(1) 学会ホームページの充実

学会のホームページを一新し、いつも最新の情報が得られるようにしたいと思います。また、英語版も充実させ、海外会員もきちんとした情報が得られるようにしたいと思います。

(2) 「地球化学」と「Geochemical Journal」の充実と電子化

学会員の研究発表の場としての「地球化学」と「Geochemical Journal」の重要性はいうまでもありません。特に、本学会の英文学会誌であるGeochemical Journalはimpact factorも近年上昇し、ますます国際的な名雑誌に育ってきています。さて、これまでのように印刷物を会員全員に配布するの

は、コストの問題や出版助成の絡みからも見直しが求められています。学会誌の電子化は時代の趨勢であり、出版体制の見直しをきちんとして行きたいと思っております。

(3) 会員の増強

いわゆる団塊の世代が大量に定年を迎える時が迫ってきていることが社会問題になっていますが、これは学会にとっても大きな問題です。学会に若い会員が増え、学問分野の裾野が大きく広がって行くことが大切です。学会は、学生会員の会費割引に修士パックなどを用意し、学会員の増強につとめています。また、シニア会員の規則もゆるくし、停年になった人も会員として留まっていただけのような工夫をしています。また、「アジア地域における地球化学・宇宙化学の連携」ということがいわれていますが、海外会員にも学会賞、鳥居基金、年会の案内など、学会員としてのメリットが十分伝わるようにしていき、海外会員も増やそうとしています。

地球化学の研究は、宇宙探査から昨今の地球の環境問題まで、幅広い分野で重要な学問分野を担っています。その研究者の集まりである日本地球化学会は研究者相互の交流、活動がますます活発にできるような組織であるべきです。また、社会に対する広報、若手研究者に対する支援なども積極的に行っていくつもりです。

「地球化学」の投稿先の変更

本学会の邦文誌「地球化学」の編集長を、本年1月より蒲生俊敬から益田晴恵に交代しました。論文や掲載記事などの投稿は益田晴恵あてに送付してください。送付先は以下のとおりです。

〒558 8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
大阪市立大学大学院理学研究科
生物地球系専攻 益田晴恵
E-mail: chika@geochem.jp

電子メールでの投稿も受け付けますが、別途原稿のハードコピーを4部郵送してください。(この件については投稿規定見直しを計画しています。)

なお、蒲生がすでに受け付けた論文については、そのまま編集作業を継続しますので、改訂原稿等は蒲生までお送りください。

学会ホームページサーバ移行のお知らせ

長い間、米田成一会員（国立科学博物館）と小林貴之会員（日本大学）のご尽力で維持してまいりました学会ホームページを（株）国際文献印刷社のサーバへ移行致しました。

また、学会ホームページの内容も平成18年4月1日から一新できますよう、現在、国際文献印刷社と調整中です。ホームページの内容変更にあたりましては、学会幹事会・評議員会を中心に議論を重ねておりますが、お気づきの点がございましたら、ニュース・ホームページ幹事の山本鋼志（news-info@geochem.jp）までお知らせ頂けますようお願い申し上げます。

修士バック 会員制度の導入のお知らせ

地球化学会会則の改正により、修士課程の学生への新たな特典ができました。修士課程（あるいは博士課程前期）の学生は会計年度2カ年一括で7,000円の会費で学生会員になれます（通常の学生会員の会費は年間5,000円）。会員になると、他の学生会員と同じく、年会発表の参加費の割引はもちろん、鳥居基金への応募権利や、地球化学講座の割引購入、などの特典があります。

2カ年一括 修士バック 会員は、来年修士2年になる人も2年バックで受け入れます。

この場合、修士2年時と博士1年時、あるいは修士2年時と社会人1年間の期間は、修士バック料金で会員になれます。来年度M1になる学生さんだけでなく、現在M1の学生も修士バックの学生として受け入れられる事になりました。特に、修士学生の指導教員の方は、勧誘/宣伝をよろしくおねがいいたします。



研究会のお知らせ

第6回核融合エネルギー連合講演会

2006年6月13日(火)・14日(水)の両日、富山国際会議場において、「第6回核融合エネルギー連合講演会 炉心・炉工の総合化とエネルギー科学としての拡がりに向けて」を開催いたします。本講演会では、炉心プラズマ、ブランケット、超伝導をはじめとする多くの関連分野の総合的な理解を深め、研究の現状と将来について社会に情報を発信するとともに、今後の核融合

研究の進め方、基礎科学への寄与、技術的波及などについて広く討論することを目的としています。また、若手研究者の将来に向けた研究協力を促進する場になりたいと考えております。

今回の講演会では「炉心・炉工の総合化とエネルギー科学としての拡がりに向けて」をテーマに掲げ、建設に向けて動き出すITER計画を取り上げるとともに、世界を牽引する役割を果たしつつある日本の核融合研究の現状や将来について広い視点から討論する場としたいと考えております。

講演会は招待講演、公開講演、特別講演、シンポジウム、パネル討論、一般講演（ポスター発表）から構成されています。また、若手（35歳以下）の一般講演者を対象とした優秀発表賞が設けられております。詳細は、以下のホームページをご覧ください。

<http://www.jspf.or.jp/rengo06/>

開催の概要

会期：2006年6月13日(火)～6月14日(水)

会場：富山国際会議場（富山市大手町1-2）

<http://www.ticc.co.jp/>

主催：プラズマ・核融合学会、日本原子力学会

共催・協賛学協会：日本地球化学会をはじめ22学会

ホームページは、講演内容他、随時更新中です。最新情報をご確認ください。

問い合わせ先

第6回核融合エネルギー連合講演会プログラム委員会（プラズマ・核融合学会事務局内）

〒464-0075 名古屋市千種区内山3-1-14F

Tel: 052-735-3185, Fax: 052-735-3485

E-mail: plasma@jspf.or.jp

Western Pacific Geophysical Meeting (WPGM)

会期：2006年7月24～7月27日

会場：北京（<http://www.agu.org/meetings/wp06/?content=search>）

セッションA07のご案内

WPGMのセッションA07は、特に東アジアの黄砂現象を中心とした大気と海洋間の物質循環を古環境から現状、将来予測まで含めて議論するセッションです。関心のある方の発表申込を3月16日の締切日までお待ちしております。詳細は、以下のホームページを

ご覧ください。

<http://www.agu.org/meetings/wp06/?content=search&show=detail&sessid=85>

(植松光雄：東京大学海洋研究所)

A 07: Asian Dust and its Impacts on Climate and Biogeochemical Cycles

Sponsor: Atmospheric Sciences

Co-Sponsors:

Biogeosciences

Ocean Sciences

Global Climate Change

Paleoceanography and Paleoclimatology

Conveners:

Yuan Gao, Rutgers University, USA

Huasheng Hong, Xiamen University, China

Zhisheng An, Institute of Earth

Environment, CAS, China

Mitsuo Uematsu, University of Tokyo, Japan

Summary:

Asian dust may affect climate through its radiative effects in the atmosphere and interactions with the ocean, in particular the Pacific basin. Supply of aeolian iron from dust to the ocean may affect ocean productivity and then atmospheric carbon dioxide concentrations at the present and in the past. However, the interactions of dust with the atmosphere and ocean are highly complex characterized by multiple nonlinear feedback processes, plus perturbation of the natural climate by human activities. It is crucial to re-exam the role of Asian dust in the climate system using a variety of approaches. This session aims at exploring the current state of knowledge of the Asian dust atmosphere-ocean-climate interactions through discussions of results from observations, measurements, and model simulations. The goal is to facilitate more interdisciplinary research efforts to advance our understanding of the role of dust in the Earth climate system; such efforts fall under the research focuses of several internationally coordinated interdisciplinary programs under IGBP, such as IGAC, IMBER, PAGES, SOLAS, etc. We welcome participations in this session, and po-

tential topics include, but not limited to: Paleorecords of Asian dust deposits in continental sediments, marine sediments and ice cores linking to the evolution of paleoclimates; reconstruction and analyses of the connections between Asian dust records and climatic factors; chemical, physical, and radiative properties of Asian dust and/or impacts on climatic direct and indirect forcing; impact of Asian dust storms on the surface radiation budget; - pollution derived substances interactions; quantification of anthropogenic processes affecting dust production; dust transport and deposition to the ocean and/or its impact on marine ecosystems; dust-climate variability projection.

セッション B07のご案内

WPGM のセッション B07「海洋の微量元素・同位体に関する生物地球化学」は、日中共同のコンピナーで企画しています。昨年本格的に始動した GEOTRACES 計画 (<http://www.geotraces.jp/>) をふまえた、中身の濃いセッションです。興味をお持ちの皆様は、B07セッションに、ふるってご投稿ください。アブストラクトのメ切(電子投稿)は、3月16日(2359 UT)です。電子投稿は、<http://www.agu.org/meetings/wp06/?content=program> から、行うことができます。お問い合わせは、蒲生(gamo@ori.u-tokyo.ac.jp) または張(jzhang@sci.toyama-u.ac.jp)まで。

B 07: Marine Biogeochemical Cycles of Trace Elements and Isotopes: from Regional to International Networks

Sponsor: Biogeosciences

Co-Sponsor: Ocean Sciences

Conveners:

Toshitaka Gamo

Ocean Research Institute, The University of Tokyo, JPN

gamo@ori.u-tokyo.ac.jp

Minhan Dai

State Key Lab of Marine Environmental Science, Xiamen University, CHN

mdai@xmu.edu.cn

Jing Zhang

Faculty of Science, University of Toyama,

JPN

jzhang@sci.toyama-u.ac.jp

Xiangkun Zhu

Institute of Geology, Chinese Academy of
Geological Sciences, CHN

xiangkun@cags.net.cn

Description: This session calls for contributions that are related to the study of marine biogeochemical cycles of trace elements and isotopes (TEIs). Studies to determine global oceanic distributions of selected TEIs and to evaluate the cycling of these TEIs are of particular interest. Such studies will enable the characterization of the physical, chemical, and biological processes regulating their distributions, and their sensitivity to changing environmental conditions. Geographical coverage ranges from marginal seas to open ocean regions. Results related to the new GEOTRACES program as well as from other liaison programs such as SOLAS, IMBER, LOICZ, and IMAGES are welcome. The session will provide a forum to strengthen regional and international cooperation.

生態学研究への同位体比の応用に関する国際会議

The 5th International Conference on Applications of Stable Isotope Techniques to Ecological Studies が、8月にアイルランドで開催されます。早期登録割引期間は過ぎていますが、4月14日まで講演申し込みを行っております。是非日本の研究者にも呼びかけて欲しいとの開催者の言葉です。なお、Jason Newton氏はGeochemical Journalのassociate editorの一人です。(赤木 右)

会期：2006年8月13日～8月18日

会場：Queens University Belfast, Northern Ireland

Just a quick reminder that the "Early Bird" registration for the 5th International Conference on Applications of Stable Isotope techniques to Ecological Studies (ISOECOL 5) closes on the 3rd of February. So if you're thinking of coming and want to save yourself a few pounds/dollars/euros etc visit: <http://www.isoecol.org/index.htm> and follow the links to register. The previous conferences have been very

successful and the number of places is limited to around 200, so booking early will also avoid disappointment. There is however still lots of time to think about abstracts (submission before Good Friday 14th April).

Full details about the conference, how to register, and the procedure for submitting abstracts is listed on the website, but if you have further questions - please contact us at isoecol@suerc.gla.ac.uk.

If you know of someone who wants to receive these notices, or alternatively if you do not want to receive further messages, please also e-mail me at isoecol@suerc.gla.ac.uk and I'll edit the mailing list as advised.

best wishes,

Jason Newton

Stuart Bearhop



人事公募

神戸大学発達科学部人間環境学科助教授・1名

1. 職名 助教授
2. 所属 人間環境学科
3. 専門分野 地質学を中心とした環境科学(具体例：環境地質学，古環境学など)
4. 担当授業科目
 - (1) 自然環境論コースの専門科目(環境地質学，自然環境科学，自然環境科学実験A(主として地学)，地球環境科学実験など)
 - (2) 学部・学科共通科目
 - (3) 全学共通授業科目(地学系)
 - (4) 大学院の授業科目(環境地質学特論，同演習，環境地質学特論 など)
5. 募集人員 1名
6. 応募資格
 - (1) 年齢が平成19年4月1日において満40歳以下が望ましい
 - (2) 博士の学位を有すること

- (3) 人間の発達と人間環境の関わりに深い興味・関心があり、本学部学生及び大学院生（博士課程前期課程・後期課程）に熱意を持って指導できること

7. 採用予定日 平成19年4月1日

8. 応募期限 平成18年4月7日

9. 提出書類 以下の書類の形式は自由

- (1) 履歴書（写真添付，学歴は高等学校卒業以上，健康に関する所見を含む，電子メールアドレスを記入のこと）
- (2) 研究業績一覧表（著書，論文，最近5年間の口頭発表に分類し，論文については査読つきとその他に分けること）
- (3) 主要論文（5編の別刷りまたはコピー（掲載予定も可），各編200字程度の概要を添えること）
- (4) これまでの研究についての説明（A4用紙2枚以内）
- (5) 着任後の研究計画及び教育に対する抱負（A4用紙2枚以内）
- (6) 推薦書もしくは応募者の業績などについて意見を伺える方の氏名（2名以内）と連絡先（住所，電話番号，メールアドレスなど）

当学部では，個人情報保護の観点から，応募書類は次のとおり取扱いますので，予めご了承ください。

- (1) 提出書類は選考以外の目的には使用しない。
- (2) 提出書類返却の希望のない書類は，選考後適正に廃棄する。

（なお，提出書類返却を希望する場合は返却先を書いた封筒を同封のこと）

10. 送付先

〒657 8501 神戸市灘区鶴甲3 11

神戸大学発達科学部長宛

（封筒に「人間環境学科公募書類在中」と朱書し，書留で送付すること）

11. 問い合わせ先

神戸大学発達科学部

自然環境論コース主任 尼川大作

Tel : 078 803 7747

E-mail: amakawa@kobe-u.ac.jp

12. その他

- (1) 審査の過程で面接及び口頭による研究内容の発表をお願いすることがありますが旅費は支給できませんのであらかじめご了承ください。

- (2) 審査の状況により主要研究業績以外の研究業績や健康診断書を提出願うことがあります。

- (3) 本学科・専攻の概要につきましては，<http://hew.h.kobe-u.ac.jp/new/>をご参照願います。

- (4) 平成19年4月より大学院改組を計画中です。改組にともなう設置審査に合格することが採用の条件となります。

金沢大学自然計測応用研究センター・助手1名

当センターは平成14年度に「自然と人間活動に関する諸環境問題の解明・解決」を目的として金沢大学に設立されました(<http://k-inet.ee.t.kanazawa-u.ac.jp/>)。また，同年度より，金沢大学が進めている21世紀COEプログラム「環日本海域の環境計測と長期・短期変動予測」(<http://www.nst.kanazawa-u.ac.jp/21COE/index.html>)の基幹的研究機構としての役割も担っています。今回，当センターではCOE拠点形成の一環として，また次期プロジェクト推進のために，下記の要領で専任教員を公募します。研究・教育分野としては地球科学・地球環境学を対象としていますが，特に，野外観測・調査に基づいて，地球化学的手法やシミュレーションを用いた地球環境解析と予知・予測に関する研究の展開が期待されます。また，現在検討中の「ユーラシア東部における現在の地表プロセスと環境変動」に関する次期プロジェクトに積極的に関与することが望まれます。

教育においては金沢大学自然科学研究科地球環境学専攻（理学部地球学科）(<http://earth.s.kanazawa-u.ac.jp/>)に属し，当該専攻（学科）の教育を分担します。

- | | |
|-----------|--|
| 1. 職名 | 助手 1名 |
| 2. 所属 | 自然計測研究部門 地球環境システム分野 |
| 3. 研究分野 | 理学 地球環境学 |
| 4. 応募資格 | 博士の学位を有すること |
| 5. 募集締め切り | 2006年4月20日（当日消印有効） |
| 6. 着任時期 | 可能な限り，早い時期 |
| 7. 応募書類 | |
| | 1) 履歴書（市販A4用紙，写真添付） |
| | 2) 研究業績目録（原著論文（査読の有無を明記），総説・報告書等，著書，学会講演に区分） |
| | 3) 代表的論文の別刷り又はコピー5編以内 |
| | 4) これまでの研究概要と今後の教育・研究計画及び抱負（1,600字以内） |

5) 応募者の研究経過等について意見を伺える方の氏名と連絡先(2~3名)

8. 書類提出先

〒920 1192 石川県金沢市角間町
金沢大学自然計測応用研究センター 柏谷健二
(封筒の表には「応募書類在中」と朱書きし, 郵便の場合には書留にすること)

9. 担当者

金沢大学自然計測応用研究センター長 柏谷健二
E-mail: kashi@kenroku.kanazawa-u.ac.jp
Tel : 076 264 6531, Fax : 076 264 6531

9. 当専攻のホームページ

<http://www.ess.sci.osaka-u.ac.jp/index-jp.html>

10. 問合せ先

大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻
中嶋 悟
Tel : 06 6850 5799, Fax : 06 6850 5480
E-mail: satoru@ess.sci.osaka-u.ac.jp
<http://life.ess.sci.osaka-u.ac.jp/>
封筒に「助教授応募書類在中」と朱書きし, 簡易書留または書留で送付のこと

大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻助教授・

1名

1. 職種・人員 宇宙地球科学専攻 助教授・1名
2. 所属 地球物理化学グループ(中嶋グループ)
3. 専門分野等 地球惑星物質科学(生命現象も含む)

今回公募対象の地球物理化学グループ(中嶋グループ)では, 伝統的な地球惑星科学とは異なった学際理的な視点から, 多様な地球・惑星・生命現象の解析や, 岩石・水・有機物相互作用などを軸とした地球惑星物理化学に関する実験的研究を展開しています。これらの研究を積極的に推進するとともに, 教育にも熱意のある方を希望します。

4. 着任時期 決定後できるだけ早い時期
5. 応募資格 博士号を取得していること
6. 提出書類
 - (1) 履歴書
 - (2) 研究業績リスト(各種研究費の獲得歴, 学会活動歴を含む)
 - (3) 主要論文5篇の別刷
 - (4) これまでの研究経過(2,000字程度)
 - (5) 研究・教育に関する今後の計画と抱負(2,000字程度)
 - (6) 照会可能者2名の氏名と連絡先
7. 公募締切 平成18年5月1日(月) 必着
8. 書類送付先
〒560 0043 大阪府豊中市待兼山町1-1
大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻
専攻長 土山 明
Tel : 06 6850 5800, Fax : 06 6850 5480
E-mail: akira@ess.sci.osaka-u.ac.jp



院生による研究室紹介 No.1

東京工業大学大学院理工学研究科
地球惑星科学専攻平田研究室

入澤啓太

【研究室概要】

私は現在, 東京工業大学大学院理工学研究科の博士課程後期1年に在籍しています。今回は, 私が所属する地球惑星科学専攻平田研究室の紹介を担当させていただきます。平田研究室には, 研究生1名, 大学院生7名, 学部生3名(2006年1月現在)が在籍しています。平田研究室では, 同位体地球化学的手法を応用し, 惑星形成, 地殻成長, 地球表層環境変遷, 生体内金属代謝と同位体分別などの幅広い研究課題に取り組んでいます。また, 農産物の産地判別などといった社会的ニーズの高い分析も行っています。

平田研究室には, 多重検出器型ICP質量分析計(MC-ICPMS), 四重極ICP質量分析計(ICP-QMS), 193nmエキシマレーザーを用いたレーザーアブレーションシステムが設置されています(図1)。共同研究も盛んに行われており, 専攻内はもちろんのこと, 学外の方々も使用に訪れます。装置は頻繁に使用されており, ICP質量分析計に用いるアルゴンガス使用量は東京都内で一番だそうです。全ての分析機器の管理や整備は, 平田先生と学生とでおこないます。特にメンテナンスは, 時間も体力も必要な大変な作業ですが, その代わりに, 2年間ほど在籍していればICP質量分析計やハードウェアについてはかなり高度な知識と技術が身に付きます。

現在, 学術雑誌などで発表される研究成果として



図1 平田研の分析機器

は、レーザーアブレーション法と ICP 質量分析計を組み合わせた固体地球化学試料の局所同位体分析が多くを占めています。これは、試料の前処理の簡便さと分析の迅速性のためです。これに対し学生の多くは、まず湿式分析を多用した化学操作の練習から始まります(図2)。試料を酸処理し、溶媒抽出法やイオン交換法を用いて目的元素を回収したのち ICP 質量分析計で分析するという、基礎的な化学操作の習得が最初の目的となります。各自が取り扱う湿式分析法は、新たに立ち上げる段階から始めることがほとんどで、各自で試行錯誤しながら研究を進めています。昨年、先生と学生全員で協力し、新しいクリーンルームを立ち上げました(図3)。これにより、湿式分析からも研究成果を出そうという意識が高まっています。我々学生は主に Ca, Fe, Sr, Ce, Nd, W, Re などの安定同位体地球化学への応用といった研究に取り組んでおり、近い将来、レーザーアブレーション ICPMS 法に勝る成果を出そうと日夜研究活動に取り組んでいます。

セミナーは週に一回行われ、これまでの研究の成果や進捗状態、問題点などを各自が発表します。対象とするテーマが広いので、多岐に渡る研究分野の発表を聞くことができ、視野を広げることができます。また、毎年5月に学内・学外の方々を集めて、学生が主催し、また講師を務める「ICP 質量分析計セミナー」を開いております。この講習会の参加が、基本的には平田研の ICP-MS 装置を利用する条件となります。また、装置のメンテナンスを含めた大掃除は年2回行っています。他に、学生で自主的に論文セミナー、基礎地球化学セミナー、さらには実験操作の習得を目的とした基礎化学実験セミナーなどを立ち上げています。東工大地球惑星では、他の研究室のセミナーに参加す



図2 実験風景



図3 昨年度オープンした手作りクリーンルームの写真

ることや、専攻全体の学生が企画・運営している「地球惑星セミナー」などを通じて他大学の先生方々の発表を聞くこともでき、知的刺激にあふれている環境です。

深夜や土日でも研究室には誰かがいるような環境なので、互いに切磋琢磨しながら研究を行っています。近くに寄ることがありましたら、気軽に遊びに来て下さい(図4)。

主な年間行事

- 5月 ICP 質量分析計セミナー
- 7月 メンテナンス&大掃除
- 9月 地球化学会
- 11月 質量分析学会同位体比部会
- 12月 メンテナンス&大掃除・博士論文発表会
- 2月 修士・学士論文発表会
- 3月 教室発表会(外部評価)



図4 全体写真（後列一番左が平田岳史助教授，後列右から3番目が筆者）



女性研究者に聞く No.1

最近では雇用体制において男女共同参画が強く叫ばれ、例えば、国大協は2010年における女性教員比率20%という目標を提言しています。女性教員比率を向上させるための積極的改善措置（ポジティブアクション）として業績（研究業績，教育業績，社会的貢献，人物を含む。）の評価において同等と認められた場合には、女性を積極的に採用すると掲げる大学が増えています。現状を鑑みると、この20%という数字は特に理系においてはかなり無理のある比率であるといえます。特に日本はフランス，アメリカなどの他先進国と比べ、大学院に進学する女子学生は増えている一方、アカデミックな道に進む女性の数は少ないという状況にあります。本コーナーは、研究者をめざしている女子学生に女性研究者の実状を知ってもらい、是非アカデミックな道に進んでもらいたいという思いと、女子学生に限らず、男子学生そして学会員のみならず女性研究者の現状を知ってもらいたいという思いから設けました。第1回目は、本学会の邦文誌「地球化学」の編集長を、本年1月より努めていらっしゃる益田晴恵先生（大阪市立大学大学院理学研究科・助教授）に伺います。

「研究分野は？」

水 岩石相互作用。海洋地殻中での続成作用に伴う鉱物形成，火成作用に働く水の影響など，水が関係する地殻内部での現象に興味を持ってきました。近年，アジア諸国での土壌・地下水汚染にも研究範囲を拡大しています。

「家族は？」

夫は学部学生時代からの友人です。長距離恋愛をしていた時期もありますが，長い恋愛中にも波風が立つような事件などは何もありませんでした。彼は私の仕事の最もよい理解者です。

結婚して10年目に娘を授かりました。高齢でしたが，妊娠中も2度外国出張をしました。子どもが連れてきた世界は，学校社会から出たことのない私には新鮮でした。また，娘（と娘たちの世代）の未来のためにと，始めた研究や仕事もあります。娘は出張の多い母親に「普通のお母さんがよかった」ということでもあります。私は娘のおかげでいっそう仕事を大切に思えるようになりました。

「アカデミックな道に進もうと思ったきっかけは？」

子どもの頃から自然の中で遊ぶこと・理科実験・地図を見るのが好きでした。大学で地学を専攻したのは自然地理を勉強したかったからです。フィールド調査と分析が両方できる地球化学を専門に選びました。も

う少し勉強したくて大学院へ進学しました。科学者になれたらいいなと思ったことはありましたが、なれるとは思っていませんでした。今の職業についているのは、すばらしい先生や友人たちとの偶然の出会いが重なったおかげです。

高校時代の友人が、今の私を「益田らしい生き方をしている」と言います。自然になるようになったところがあるのかも知れません。

「博士に進むときの家族の反応は？」

理学部へ進学する時に、最初に母を落胆させました。彼女は私が資格の必要な専門職に就くことを望んでいました。大学院へ進学するときには、大反対されました。最終的には、「そんなに勉強したいなら、好きなだけさせてやれ」と、父が母を説得しました。このとき、私は博士号取得までは考えてはいませんでしたが、両親は後期博士課程まで進むことを覚悟したようでした。後期博士課程に進むときは何も言われませんでした。

「研究の中で印象に残るできごとは？」

私はSFを読むのが好きな子どもでもありました。研究していると、自分がSFの世界で暮らしていると錯覚することがあります。電子顕微鏡で粘土鉱物の基底格子面を初めて見たとき、ナノスペースだと感動しました。フィールド調査ではタイムトラベルをしていると思うこともしばしばです。そんな中で一つだけというのなら、しんかい6500で初めて潜航した時のことです。マリアナトラフの海底で見た溶岩や光る微生物の美しさは、職務を忘れて言葉を失うほどでした。潜航終了後、あきらめずに地球化学を続けてきてよかったと思いました。南洋の深い藍色が大好きなのですが、帰国する時に飛行機から見た青い空と海が、それまでと全く違って見えたのを覚えています。

「女性ゆえに損（あるいは得）をしていると感じることがありますか？」

教育現場でアカハラやセクハラなどの問題に巻き込まれることがあります。女性であるがゆえの不利には猛烈に憤りを感じます。けれど、私自身は幸運にしてそのような経験はありません。

私は女性であるために損をしたと思ったことはあまりありません。民間企業への就職を断られた時にも、先生たちは私のために怒ってくれました。鈍感だった

ことも幸いしているのかも知れませんが、先生がいつも私の立場に立ってくれていたため、女性差別だと深刻に感じたことはありませんでした。

女性は人数が少なくて目立つため、就職してからは得をしたことの方が多いような気がします。行政や国際協力など、男性であれば回って来なかったかも知れない研究以外での役職に早い時期から携わり、社会経験を深めることができました。誰でもができることでない経験ができることはありがたいことです。

「後輩に一言（女性研究者へのすすめ）」

研究の現場で若い女性と一緒に働く機会が増えていることを実感しています。数は力です。自分や自分の娘たちが自分らしく生きられる社会を実現できよう、一緒に頑張れる仲間がもっと増えることを期待しています。

科学者は（特にフィールド科学分野では）なかなかお金持ちにはなれませんが、楽しい仕事です。研究に関わる様々な経験を通して、心も成長し続けることができます。好きなことに夢中になっている人には、迷惑を引き受けて助けてくれる人が必ず現れます。もしつらい思いをしている人がいたら、努力をあきらめないで下さい。



書評

『カドミウムと土とコメ』 著者 浅見輝男
出版社 アグネ技術センター 3,000円+税
ISBN 4 901496 28 X B 6 版 151ページ

地球化学者にとって地表の重金属元素の存在は無縁ではない。また、生物がその循環にどう関わっているかも決して無縁ではない。しかし、このタイトルのような直接的なタイトルになると、やや距離を感じてしまうのは私だけであろうか。

本書はカドミウムに焦点を絞って、土壌中の存在度、植物への吸収などから、さらに水田の修復、食品、政府の対応、基準値の設定へと進み、最後に生産量、消費量を扱っている。地球化学的に基本的な地表における元素濃度からその循環を扱い、さらに社会地球化学という分野の関心事である、経済社会が関連した循環を扱っている。書評を書きながら、はからずと

も地球化学の裾野の広さを感じた。地球化学の多彩さを示す授業の資料に使えるようである。

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

ニュース担当幹事が下記に変わりました。今後とも従来と同様、皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会、シンポジウムの案内、人材公募、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。本号からは新たに“院生による研究室紹介”“女性研究者に聞く”という2つのコーナーがはじまりました。こちらのほうも原稿をお待ちしております。編集の都合上、電子メール、フロッピー（マックもしくはDos/Vいずれでも結構です）での原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしく願いいたします。次号の発行は2006年5月頃を予定しています。ニュース原稿は4月中旬までにお送りいただくよう、お願いいたします。また、ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者

山本鋼志

〒464 8602 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院環境学研究科
(理学部気付)

Tel/Fax : 052 789 2522

E-mail: news-info@geochem.jp

南 雅代

〒464 8602 名古屋市千種区不老町
名古屋大学年代測定総合研究センター

Tel : 052 789 3091

E-mail: new-info@geochem.jp